

こんな風に 生きてみよう... 喜びの中に飛び 込む

ニコラス(チリ)

夏にはおばあさんの家によく行きました。おばあさんの住んでいるところには大きなプールがあるので友達も誘って行きました。お年寄りはありませんので、おばあさんには簡単に挨拶だけしました。

でもこんなふうにはいけない、もっと愛さなければいけないと感じました。

ある日プールに行くのではなく、おばあさんのところに行き、どう暮らしているかなど尋ねたりして一緒に過ごしました。興味もでてつまらなくはありませんでした。

こんなふうにした後で帰りに挨拶を交わした時は、いつもとはちがってとてもうれしい気持ちになりました。



他の人の

喜びや

悲しみを

共に生きるように
努力する

いのちの言葉 | 04

すべての人に対してすべてのものになりました。 (コリントの信徒への手紙一 9・22)

聖パウロは、なぜ彼が謙遜に自分の権利を放棄し、自分の仕事に対する報酬を受け取らないかについて説明しています。

自分をあらゆるレベルの人と同じレベルに置き、自分もその人たちの一人になりました。それは彼らの間に福音の新鮮さをもたらすためでした。

彼の愛に誰もが応えるわけではないことも分かっています。それでもパウロは、すべての人を愛し、主の模範に倣って、すべての人に仕えようとします。

相手と一つになる、分かち合う

キアラ・ルービックは、福音的な愛について語りながら、このみ言葉を「相手と自分を一つにする」という言葉で表現し、その大切さを次のように説明しています。「私たちは、泣く者と共に泣き、笑う者と共に笑わなければなりません。そうすれば十字架は大勢の人で共に担われ、喜びはいつそう大きくなって、多くの人の心に伝わります。(…)私たちはイエスを愛するために、イエスと同じ愛をもって隣人と自分を一つにします。そうすると、私たちの内にある神の愛に触れた隣人が、今度は私たちと自分を一つにしたいと望むようになり、互いに助け合い、自分の理想や計画、愛情までも分かち合うようになるでしょう。(…)」

この福音は、自分の確信を脇に置いて、相手がすることを何でも無条件に受け入れるように求めている、と考えたり、自分からはあえて積極的な提言をしないように勧めている、などと誤解をしてはなりません。

相手と自分を一つにすることは、弱さを表わすものではなく、本当に自由な心で人に仕えようとする姿勢を示すものです。

この様に生きることによって、普遍的な兄弟愛を実現することができ、そのためにイエス様は私たち人類のために命を捧げてくださったのです。

今日は、何か批判する前に、相手の立場に立ってみよう。